

## 元旦の「能登半島地震」の発生で考えたこと

### 『津波てんでんこ』

津波の被害をしばしば受けています三陸地方では、昔から、「津波起きたら、てんでんこだ」と伝えられています。この『津波てんでんこ』は、防災上の教訓として、「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台に逃げろ」の意と解釈できます。勿論、素早い避難行動で、自分の命は自分で守ることが第一義ですが、大切な人との間に津波に対する認識と相互の信頼を深めておくことも含まれています。更に、万一、一方が亡くなる事態になった場合も、生存者側の罪悪感を減らすことにも役立ちます。

### 『令和てんでんこ』？ NHK アナウンサーの絶叫！

元旦の午後 4 時 10 分に発生した「能登半島地震」(最大震度 7, マグニチュード Mj7.6)では、14 階建ての 11 階に位置する拙宅(横浜)でも、かなり大きな揺れが長い時間続きました。地震後の習慣で、NHK テレビを視ましたら、4 時 6 分の予震(最大震度 5 強、Mj5.5)で始まった緊急地震速報が流れており、山内泉アナウンサーにより、比較的淡々と地震情報が報告されていました。

しかし、4 時 12 分の「大津波警報」の発令を機に、人が変わったように、「(大)津波警報が出ました。今直ぐに逃げてください！」、「高いビルか、海岸から遠く離れた所に逃げる。決して立ち止まったり、引き返したりしないこと。周りの人にも『津波が来るぞ！高台に逃げろ！』と呼び掛けながら逃げること」、「皆さんで命を守ってください！」、「命を最優先に今直ぐに逃げてください！」、「テレビを視ていないで、急いで逃げてください！」と、大迫力で『絶叫』し続けました。山内アナは、普段は冷静・沈着な印象ですので、この言い切る物言い、命令口調に驚きました。更に、「テレビを視ていないで、急いで逃げてください！情報はラジオやスマートフォンでも入手できます！」と、ダメ押しまでありました。これらの文章は、山内アナのアドリブのようで臨場感が抜群でした。そして、山内アナの直向きさと一所懸命さが伝って来ました。

### 今回のアナウンスメント(報知)の賛否

有無を言わさないような、上記の山内アナの絶叫調のアナウンスメントには、当初、SNS 上で「ちょっと怖い」、「大袈裟だ」、「息子が怖がり“ウチに津波来ないかな？”と怯えて寝つけない」と否定的な意見がありました。しかし、津波の実際の被害状況や避難を決意させた実績、翌日の伊藤海彦アナによる“X”(ツイッター)なども背景に、次のような肯定的コメントが多く、高い評価が広く定着しました。「もの凄い緊迫感で、さすがプロだと思いました」、「あの迫力ならさすがに家を出ます。まさに命を守る呼び掛けでした」、「冷静より緊急事態だと言うのをしっかり伝えた方が良いと感じた日だった」、「NHK アナの皆さまには尊敬の念が深まります」。

伊藤アナが示したノートには、東日本大震災当時、武田真一アナらの言葉として、「普段の『冷静沈着さ』を捨てた『異常な姿』を見せることで、視聴者が『特別なことが起こっている』と感じて、それが『避難行動』に繋がる」などが、綴られているとのこと。加えて、筆者個人の意見では、山内アナの初任職場が金沢放送局であり、地元の方への特別な“暖かい思い”が、言葉の奥に籠められているようでした。

### 報道で取上げられていない情報

冬場の日本海は波浪が大きく、通常、海上工事は行われません。港湾や海岸で仕事する関係者にとって常識的な情報ですが、筆者の知る限り、「能登半島地震」の報道では取上げられていません。海路を使っての支援物資の運搬が、阪神大震災、東日本大震災のように大量には行われていない理由の 1 つだと思います。その観点から、NTT ドコモ、AU が取った勇気ある選択は賞賛に値します。陸上基地局が地震で破損

して、スマホが使えないエリアがあることから、両社は、通信基地局の設備を搭載された船を、冬の現地海域で運用しました。関係者のご苦勞も大きかったものと想像されます。

また、日本海の潮の干満が 20cm程と小さい港が多いことも、報道されていません。干満差が 5, 6mにもなる有明海などは例外としても、太平洋側では 2mを超える港も少なくありません。これは、日本海側で津波が到来する際は、ほぼいつでも『満潮』に近い潮位であることを示しています。地震発生から早いところでは到達まで 1 分と極めて短時間であることと併せて、記憶しておくべきだと考えます。

最後になりましたが、被災地の一日も早い復旧と復興を祈念いたします。

※上述しました山内アナウンサーの言葉は、インターネットで現在も視られるビデオ画像から、筆者が文章化しましたので、正確な表現ではない可能性があります。ご了承ください。

副代表理事 岸田 隆夫(令和 6 年 2 月 5 日)